

東北地方太平洋沖地震による福島第一原発の炉心溶融事故に際し 若狭の原発の即時運転停止と耐震性なき原発の閉鎖を求めます

若狭連帯行動ネットワーク 大阪

M9.0の大地震が発生し、大津波が東日本を襲い、東北地方の沿岸地域は壊滅的な被害を被っています。

自動停止した東電福島第一原発の1号炉と3号炉では、炉心空だきによる燃料棒の破損・溶融という深刻な事態に陥っています。燃料棒被覆管が水・ジルコニウム反応を起こして崩壊し、生成された水素が原子炉建屋内に充満して大爆発を起こし、原子炉建屋上部が吹き飛ばされました。15日、2号炉で、格納容器から放射性物質が漏れ、発電所内の職員の退避命令が出されました。4号炉でも水素爆発火災が起こっていました。原子炉内の放射性希ガス、放射性ヨウ素やセシウムなどの揮発性放射性物質が大気へ放出され、敷地内外の放射能汚染をもたらしています。炉心への注水作業に従事していた作業員が負傷し、避難し遅れた住民数十名ないし数百名が被爆するという事態も生じています。午前10時22分、3号炉付近で400ミリシーベルト（被爆すると血液の中の白血球が減るなど）という非常に高いレベルが放出されました。

4つの原発とも次々と深刻な事態を引き起こし、放出放射能も人体に直接影響がでる深刻な事態となりました。環境の放射能汚染と住民の放射線被爆がもたらされるという最悪の事態となったのです。

福島第1原発から半径20キロ圏の避難、20キロ～30キロ以内も室内待避が出されました。

東電の清水社長は13日の会見で、福島第1原発について「(今回の地震による)津波が大幅に想定を超えていた」と述べ、津波をかぶったことで非常用電源が故障したことが被災の最大の要因だったと言い訳をしています。事故が起こるたびに自分たちの想定を超えたのだからと言い逃れようとしています。いつまでも同じことを繰り返す電力会社の姿勢にはうんざりさせられます。

電力会社はこれまで、原発の安全対策の至上命令は「止める」「冷やす」「閉じ込める」の三つと宣伝してきましたが、3つの炉では、最初の「止める」だけしかできず、「冷やす」「閉じこめる」は崩れ、重大な事態となりました。炉心溶融事故は国内で起こり得ないとしてきた国や電力会社は深刻に反省すべきです。

日本列島はいつ、どこで大地震が起きてもおかしくありません。私たちは、地震対策を抜本的に見直し、耐震性なき原発を閉鎖することを求めてきました。福島原発では、新耐震設計審査指針によるバックチェックも行われましたが、今回の地震規模はその想定を遥かに超えるものでした。他の原発においても根本からの見直しが不可欠です。

貴社は、若狭の原発を止めるべきです。地震規模の想定を抜本的に見直し、耐震性の保証されない原発を閉鎖すべきです。そして脱原発へと向かうべきです。

貴社は、いつ何時重大事故が起こるかとビクビクする生活を私たちに強いるのをやめ、より安全側にたち、脱原発へ向う安心を得る生活へとシフトさせる道を選択してください。

再度訴えます。若狭の原発を即刻運転停止し、地震規模の想定を抜本的に見直し、地震動の過小評価をやめてください。そして、耐震性の保証されない原発を閉鎖してください。